

# Book Review

## 現義歯から読み解く 新義歯への手がかかり

松田謙一 著



Reviewer

小野高裕 Takahiro Ono

(新潟大学大学院歯医学総合研究科包括歯科補綴学分野)

A4 判変、オールカラー、  
96 頁  
定価 (6,000 円+税)  
医歯薬出版刊



100 ページ足らずの手に取りやすい本である。黒っぽいカバーをよく見ると、ダークグレーのグラデーションで、世紀末のロンドンで活躍した名探偵の横顔が浮かび上がる。

目次を開くと、12 の事件 (症例) を収録した短編集であることがわかる。各編の冒頭に記される症例の概要は、年齢と主訴と現病歴が一行ずつ、驚くほどシンプルである。あとは義歯の写真しかない。しかも、枚数も一定ではない。口腔内も顔貌も、一切提示されない。実は周到に用意されたこの情報と写真を、読者はまずジックリ観察し、主訴に結びつく義歯の問題点を考える。

次にページをめくると、名探偵マツダ先生が登場し、同じ写真の上で捜査を開始する。彼はどこかの探偵のように、決して勿体をつけて読者を煙に巻くようなことはしない。あくまで、映っているもの、目に見えるものから推論を重ねていく。マツダ先生は結構細かいので、写真とキャプションとを何度か見較べるくらいの努力は求めら

れる。がんばって読み進めるうちに、だんだん痛快な気持ちになる。なんとというか、「参ったな〜」という感じの爽快さである。

今日の義歯治療は、高度に専門的な口腔機能のリハビリテーションのアプローチとして位置付けられ、従来重視されていた診療・技工のテクニックだけではなく、より合理的・効率的なセオリーの裏打ちが求められる。学生教育の現場では、従来の義歯の設計・製作法について講じる前に、術前診査・検査からいかにして全体的な治療と管理のプランを立てるか、その道筋を示さなければならない。

そこで問題になるのが、現義歯からいかに治療に有益な情報を引き出し、新義歯の治療計画に活かすか、である。たしかに、「現義歯に学べ」ということわざは以前からあった。しかし、卒前・卒直後教育において、その重要性を理解させ、いかにして実践するかを教えるのは簡単なことではない。臨床実習を開始する前の PBL や開始後の症例検討会で、義歯症例を提

示し、現義歯の情報を診断・治療計画に活かす取り組みは各大学で行われているが、そもそも「何をどう教えるか」で悩む以前に、自身の「分析力」や「洞察力」に不安を感じている教員は私だけではないと思う。

マツダ先生は、この「事件簿」で、「現義歯に隠された新義歯のヒント」を見つけるノウハウを遺漏なく解説してくれた。しかも、決して主訴の原因を探る「死因検証」ではなく、死者を蘇らせる「プランニング」の過程として。おまけに巻末には、名探偵の捜査のノウハウも惜しみなく開陳されている。マツダ先生には悪いけど、この本はすぐに学生や研修医に勧めるわけにはいかない。その前にまず、教員が読んでおかないと (笑)。

読み終えてから、義歯探偵マツダ先生の爽快感は、シャーロック・ホームズというよりも、「読者への挑戦」に見るエラーリー・クイーンフェアプレー精神に通じているような気がした。謹んで、「補綴界のエラーリー・クイーン」の尊称を奉りたい。